

# 會



# 報

1962年8月

222

日本山岳会

六月十二日ピラフォンド氷河中流にBCを設立しました。高度四八〇メートルのモレインの上です。スカルド出発以来十八日の楽しい旅でした。シヨークの谷はシガールの谷にくらべてかなり裕福らしく、村々も大きいようです。住民も進歩的で女もあまり人おじせず、ひなまれも多くなりかまきす。インド・アリアン系の顔立ちですから時にはハツとするぐらいの美人もいます。しかしこの美人連も三十才すぎたら例外なく鬼ババになってしまいます。厳しい自然環境と、非衛生と貧困が彼女らの美貌を残酷に奪い去るのでしょう。村では例の如く診療をやっています。が八十才くらいにみえる老人が四十才だったり、道中の治療では手のつけられないのや、全くホープレスの者もいて心が痛みます。

最後の部落ゴマをすぎたからはいかにもカラコラムらしい五千〜六千メートル級の岩峰や、雪峰が眉に迫り岩登り屋が見たらうずい喜の涙をこぼすようなバットレスやニードルが比高千〜千五百メートルと立ちほだかります。こんなのが日本にあったらもう何百人も死んでいるでしょう。季節が早い

## カラコラム通信

加藤 泰安

め草木はまだやつと新芽を出したばかりで殺風景ですが、この谷は動物が多く、愛らしい小鳥はすでに春をつけ、狼、狐、鳴鬼、テンの類をおりおりみかけます。カラコラムの名物アイベックスも近くにあらわれ、一メートルから一・五メートルほどの見事な角をふり立てて岩壁を駆け去って行きます。悪名高いバルティ・ポーターも今回はリエゾン・オフィサーの手腕のためか、われわれが扱いになれたためか、あるいは谷筋によって人気が違うのか、意外に

われわれのこれからの計画は、選抜した五十人のクイリーと十人のハイ・ポーターと隊員とでピラフォンド・ラまで五トンの荷物をあげ、さらに選りすぐったクイリー三十人でピラフォンド氷河とシアチン氷河の合流点まで四トンの荷物をあげ、それから先はポーターと隊員とでサルトロ氷河を登りサルトロカニリの直下までにB・Cから五つのキャンプを進め、それからいよいよ東南面の登攀にかかります。この間三〜四のキャンプを要すると思います。目下のところ登頂は七月末と予定しています。

まったく気の遠くなるような氷河の旅ですが、あの東京のいきれや自動車におどかされることもなく、電話のベルも鳴らない生活も楽しいものです。入浴せざることも二十日あまり、日焼と垢とプシヨ一髭皆みられた面ではありませぬ。集会用の大メステントもオンボロ亭と名づけられました。

目下のところ私の体の状態は非常に好調で、昨日も五千メートル付近で九時間ほど登降しましたが全く好調で、若い隊員は多かれ少かれ頭痛、悪感を訴えていました。が、私はまだ全く高所障害をうけておりません。

なおパキスタン国防省より得た今年の各隊の模様をお知らせいたします。

- ・パキスタン・アメリカ合同登山隊 (隊長フエリック・K・ナウス) 目標 マルビティン・ウエスト (ドバニ)
- ・パキスタン・英国合同登山隊 (隊長E・J・E・マイルス少佐) 目標 キンヤンキシ (プマルキシ)
- ・ケネイス・ヘウイット博士隊 目標 バルトロ氷河
- ・イタリア科学遠征隊 (隊長A・デシオ博士) 目標 スカルドウーシガールブルドール

この他ドイツのナンガパルバット隊が隊長ヘルリッヒ・コッフアにひきいられて九人のうち女性一人がラワルピンディにきていました。彼等はアプリケションも出さず、勿論パーミッションもなく、ずい分強引な手でやってきて結局許可はおりましたが、こんな手もあるのかとあきれました。

(六月十九日付 三田副会長あて)

### サルトロ・カンリ初登頂

京大とパキスタンの合同登山隊は七月二十四日、午前十時四十五分同峰の初登頂に成功した。

四手井隊長以下全員九月四日羽田着帰国。

## 尾瀬の地図と地名

武田久吉

昔から尾瀬に入って居ながら、尾瀬の地名については、恥かしながら余り詳しく確かめる機会がない。一つには其処の住民というものがいないので、一番古くからその地に入っている檜枝岐の釣師にでも尋ねて見るのがよいのだが、その機会に恵まれない内に、故老ともいふ可き人は次第に亡き数に入ってしまうのと、一つには従来の地形図が不正確なために、実際には、一々その地に行つて、この流が何とつかを突き止めなければならぬので、荇苒今日に到つてしまった。

幸いにも、「昭和三十三年要部修正図」が三十五年に発行され、またその折の「麓ヶ岳」と「藤原」の両図幅をつないだ集成図「尾瀬付近」というのが、昭和三十六年六月に国土地理院から発行されてこれには前記両図幅に洩れた地名が沢山記入されたので、その恩恵を受ける人や、その誤謬を踏襲する人が多いかと思われるので、気のついた点をここに挙げてみる。

来、軍事上の重要性のみが強調された傾きがあり、民衆の使用上の利害関係は無視されたかに思われる。従つて、軍事上重要でない地形や殊に地名は、二次的に考えられたかに見える。それで山地の地図は、大正五年ごろ日本山岳会が働きかけるまでは、測量済みのものでもなかなか印刷発行の運びに至らなかった。敗戦後これを受けついで地理調査所も、またそれが昇格した国土地理院も、その擧に倣つてか、地名にはかなり無頓着なこと実に驚くべきものがある。

上記の集成図には、「沢の名称は現地関係機関の資料による」と、責任転嫁の意味か、それとも無責任な事はしないか、という意味なのか、そう断つてあるが、現地機関とは何を指すのか、はっきりしない以上、私達は決して安心は出来ない。その上、変な背景が働くこと妙な結論が報告される。

役場で尋ねたとて、本当のことがわかるには限るものではない。信州の上河内に上高地と県庁で当字した例があるから、それが正しいのだと思うような軽率な態度で地名を論じたり、「善光寺道名所図会」に神河内とあったからといつて、何もそれが標準になるわけはないので、地名の意義を考えずに理屈を言つても始まらないのである。

さて本題に入つて、彼の「集成図」であるが、これには「追貝」図幅の上部も含まれていて便利であるが、東小川から蛇富峠を越えて下り着いた土出の「閑野」とか、その先の「伊閑野」という小字も入れて欲しかった。その北の「古中」とあるは、古い地図の通り「古仲」と書くべきであらう。「仲」が義務教育漢字に無いからといつて、地名や姓名を勝手に変えられてはたまらない。

「戸倉沢」は昔から記入してあったが、その次の「六郎沢」と「漆沢」は新規記入のためか、赤字で入っている。その次の沢は「フノウシロ」というのだが、現地関係機関が書き落したと見えて「フノウシ沢」となっている。これと漆沢の間を「女石平」というのだが、バスで通るハイカーには用がないと思つてか、記入洩れ。片品川の左岸に流入する「女石向ノ沢」「ワル沢」「ナガヤ沢」など

は、記入しないで大して悪いことはあるまい。

「尾名沢」の対岸の沢は、土地では「大バンナ」というが、多分大きなハナノキがあったからの名であらうから、「大バナ沢」でも宜しかるうが、水線がほしいところだ。いま「大清水」と呼ばれているバスの終点の少し手前に、大清水という大量の清冽な水が混々と流れている。これなども水線と共にその名称が示されて然るべきだと思ふ。

大清水小屋の前から片品川の橋を渡ると「根羽沢」（正しくは粘沢）の流域に入る。「湯沢」の北の「北湯沢」の名があつても悪くはあるまい。

元に戻つて少し行くと、材木を出すトラック道が「中の岐沢」の可なり奥まで入っている。その口元近くに、左岸から「オロタキ沢」が、間もなく右岸から「日向タキ沢」が注ぐが、これを「日向キタ沢」としたのは滑稽である。「オモジロの沢」の次の短い沢は「ドマ沢」とあるが、これは「ドロ沢」であらう。トマという詞はあるが、ドマは沢の名にならない。加之ならず、この辺ではトマという詞を使うかどうか。「ドロ沢」に向いあつて「ジョウエン」という沢があり、その奥に同じく左岸から注ぐ「沖ジョウエン」というのがある。

昭和三十七年六月十七日  
日本山岳会有志閑談会  
於駒込六義園

◎出席者（到着順）  
岩永信雄、松本熊次郎、足立源一郎、田部重治、高木菊三郎、冠松次郎、神谷恭、藤島敏男、野口末延、吉田久兵衛、島田巽、島山梯成、岡徳徳之助、太田敏、山崎安治、古沢肇、瀬名貞利、近藤茂吉、吉沢一郎、関根吉郎、村井米子、渡辺公平、松方三郎、桜井信雄、（世話人）交野武一、織内信彦

六義園の会も、回を追うこと五回、前日までの雨もよいもこの日はからりと晴れ上つて、心泉亭に集る二十六人の常連の顔は明るかった。一般入園者が立ち去つた人影もなく静かな庭園を散策する会員などあつて盃を上げたのは定刻をおくられて五時頃であつた。

例によつて田部さんの秩父の話から始まり、最近スイスから帰つたばかりの足立さんがグリーンデルワルトのスケッチ旅行談、松方さんの欧米を駆け廻つてきた話など、どれもそのまま聞き流すには惜しいような興味溢るるばかりのものであつた。次回世話人として野口、瀬名、古沢の三氏が指名され、午後八時尽きぬ話題に名残りを惜しみながら閑談会は閉会した。

「小淵沢」には「濁り沢」という名もあるから、これも記入して置いた方が宜しかろう。その次のが「彦ノ函沢」で、袴腰山から出るもの。

黒岩山から流れ出す大きな沢は「北の又」で、中ノ岐の本流と言つてもよいであろう。その南の「猿沢」はよいが、鬼怒沼山の方から出るその支流は「ブナ沢」で、「ブナ沢」なんていう名は、日本にはありそうもない。「東沢」とあるのは「東又」の方がよからうと思う。

三平峠の登り口ともいふべき一ノ瀬には地名があつてほしい。地図には直接の関係がないともいえるが、昨年ここに吊橋が出来て、これからは大雨でも流失の患いはなくなつたが、これに「三平吊橋」と銘打つたのは、いかにも他所者のやりそうなことだ。

三平峠の西北に当る湿地記号に「大清水平」と記入するを要するし、その東北に当る湖畔に「大清水」という地名がある。

「檜高山」(ひのきのたかやま)は、「檜ノ」とすべきで、さもないと、そそっかしい人は「ヒコウ山」などと読まないでもなからう。これから流れ出す「檜ノ沢」の南にある半島は「檜の突出し」で、これ全体を湿地記号で表わすのは乱暴だ。それに反して「押出(おんだし) 湿原」にその記号が落ち

ている。

「大江川」は中流まで小舟が入るほどなのに、水線も名称も記入してないのは手落ちというのほかならぬ。

「沼尻(ぬしり) 小屋」はいままで無人であったが、それにしても無人小屋の記号がない。

富士見峠に登る硫黄沢の支流にも大分名称が入つたが、荷鞍山の西南面から流れ出す「丸山川」が落ちてゐるし、「サブツタラ沢」や「冬路沢」が記入洩れである。その上「田代原」の名もない。昔から「馬洗い淵」として知られてゐるものに「馬洗湖」は恐れ入つた。さては現地関係機関なるものも焼きが廻つたかな。

笠科川が片品川に合流して間もなく、右岸の堂平山の南に、西山から流れ出す「コベヤマ沢」になぜ水線を入れないのか解釈に苦しむ処である。鳩待峠への道が、富士見峠への道から分れて笠科川を渡つたあたりに「十二平」の名を入れたらどんなものであらう。昔からの名所は省かない方がよい。西山の東北面から流れ出す沢を「ニシグリ沢」と呼ぶが、これは本来「西栗生沢」である。そのやや上手に左岸から注ぐのが「クサツ沢」、その上手で、右岸の「イシゴネ沢」よりも上に「イガゴヤ沢」が注ぐ。その付近で昔の渡渉地点が一ノ瀬である。

鳩待峠から山ノ鼻までの「川上」の支流の名は宜しいが、右岸から入る「鳩待沢」の名が落ちてゐる。また川上川の上流には「馬道沢」という古名がある。

峠から至仏山に登る新道が二、〇四八米の小突起の北を通るが、この少し先にある田代を、山の鼻小屋の未己三老人に聞かれて「御山田代」の名を提案したが、どう聞き違えたものか、近頃のハイカーは「御山沢田代」と呼んでゐる。この田代は沢の中にあるのではないから「沢」の字を省くがよい。上記の突起は大して顕著なものではなく、その北の二、〇六〇米の峯が「小至仏」なのである。

原の牛首の西の沢は「牛首沢」で、それを「手道沢」と読み違へたと、笑話になる。そして「上の大堀」の名を忘れてないで貰いたいものだ。「セン沢」の支流の「丸池沢」も再検討を要する。「龍宮」の上流に当る「長沢」に水線も名も記入してないのはどうしたものか？ この「龍宮」の名は昭和になつて出来たもので、昔の人がさう呼んだと説明するのはどうかと思ふ。今の龍宮小屋の近くに「皮籠(かわご) 岩」を忘れたのは失態である。

「十字路」と呼ぶのはまだよいが、その辺に「見晴」と有人小屋の名が記入しあるのはとんだ誤りである。そんな名の小屋はないしまたそんな地名もない。昔からの地名は弥四郎小屋の湧水から流れ出す溝に文右衛門の「丈」を取つて「丈堀」というのが正しいのだ。「大反沢」に「大権沢」と記入したり、至仏山から西に出る「道摺沢」に「平弦沢」と当字するところを以て見ると、地理院という役所には、日本語を知らぬ人がいるものと見える。裏林道の「上(うえ) 田代」の西の横田代や西田代にも地名がほしい。

富士山頂診療所実施について  
過去三ヶ年にわたり厚生省国立公園管理人舎を利用し、山岳に関する研究並に診療に従事いたしてまいりましたところ、幸い会員の多大のご援助をいただきお陰をもちまして多くの成果をあげることができました。  
本年は種々事情もあり、開設の時期がおくれましたので、とりあえず東京の先生方にお願ひいたし七月十四日から実施、八月三十一日閉鎖、医師延人員二十九名、患者総数一、三六〇名でありました。

日本山岳会研究部  
本号目次  
カラコラム通信……………一  
尾瀬の地図と地名……………二  
第五回有志閑談会……………三  
富士山頂診療所……………三  
北大チャムラン通信……………四  
早大ベル・アングレス通信……………四  
上高地山荘使用規程……………五  
ルーム・並に山荘募金報告……………六  
黒部の岩登り……………六  
前穂高の古道ウエズン・ル……………六  
11トを通る……………七  
関口泰氏と私……………八  
図書紹介……………九  
会員通信……………一〇  
会務報告……………一一  
支部長会議……………一二  
支部報告……………一三  
ベル政府発表の免稅処置と……………一四  
報告義務……………一四  
ネパール政府登山規則に對す……………一六  
る追加規定……………一六

## 遠征隊 ヤマラヒ大北

## 通信 ランチャム

## 紀征野中

設(約四、八〇〇m)  
五月十日、小林、久木村、鈴木、チャムラン西稜を偵察するも、岩稜が標高差一、〇〇〇m位続き、ジャンダルムと名付けた岩峯あり、取付方法なく、あきらめて北西稜を目標す。ホング・コーラ上流にC I建設。ホング・コーラは岩のガラガラした川で、川の流れは大きい、左右共開けた明るい感じ、巻き終えた下のあたりはモミの木が生え、シヤクナゲの大木もある。川が開けているので雪が少く、上流の荷上げは順調にすんだ。

五月十一日 隊長、リエゾン・オフィサー、BC入り。小林、久木村、鈴木は北面登路を偵察。北東面に廻りこむルートを研究。

五月十二日、岡本BC入り、小林BCに戻り作戦会議、現状ではC IIを五、三〇〇m、C IIIを六、〇〇〇mとし、C II、C III間の尾根を廻り北東稜に向うところがキーポイントとなる。

五月十三日、隊長C I入り。途中にて西南面の氷河の登路を検討する様、BCの岡本、小林に指令した。永光、久木村、鈴木はC II予定地よりC IIIに向うも、稜線をこした次の氷河でトラバース絶望とみて、夕刻C Iへ帰る。久木村は連絡のため更にBCへ下る。

五月十四日、岡本、小林、久木村、サーダーは、いわゆる「長髪ルート」偵察に向い、C I予定地を氷河の末端におき、氷河上を偵察、標高差一、〇〇〇m近くあるも稜線迄は容易と見通しをつける。なぜこのルートを偵察隊が見落したか不思議な処である。この日隊長はBCへ、永光はC Iへ一日でC Iの移動を終る。

御無沙汰致しました。ダーラン出発以来気にはかかっていたのですが、ポストランナーを雇えなかったのと、ホング・コーラが予想外に悪かったのが重なり大変失礼致しました。私達は無事ホング・コーラの廻りに成功しました。ゲデルから入るホング・コーラは途中ゴルジュの連続で大部隊では通過が難かしく、ゴルジュの終る迄尾根を越す道を通ったのですが、約四、〇〇〇mの峠を四つ越えねばならず、加えて今年には予想外の多雪と融雪遅れでキャラバンの後半は大変なものでした。(中略)

四月十七日、ダーランを出発した一行は先発、本隊に分れてキャラバンをすゝめ、四月二十四日ゲデル着、これよりホング・コーラのゴルジュの高捲きに苦勞し、五月七日メラ・カルカに仮のB・Cを建設。翌八日、隊長、久木村、安間、B・C、C Iの位置偵察に雪の中をかける。BCはメラ峠への道の少し上に、C Iは西稜ルートの登り口に定める。

五月九日、小林、久木村、安間、鈴木、サーダー以下シエルバ、ポーターでBC建

C IIは稜線上、C III以降は南西稜をたどることになるが、稜線の行動はなんとかなりそうである。十五日は、氷河中段に仮C II、十六日稜線上にC II十八日にはC IIIとアクリマチゼーションが間に合わない恐れがある位、急ピッチにキャンブ建設がすすみ、五月下旬、二十四〜二十八日頃には登頂隊をだせる見込みです。

では会の皆様に宜しく。帰路は六月八日は会の皆様に宜しく。帰路は六月八日キャラバン編成の予定です。

(五月十五日付、BCにて)

## △その二V

## ナムチェ・バザールにて

御無沙汰致しました。この手紙がつく頃には、すでにカトマンズよりの外電が入っているものと思いますが、無事チャムランの登頂を終り、ナムチェバザールに出て来ました。日本の新聞では、出発が遅れ登頂は困難だろう等と報じられ、皆さんも相当に心配されたことと存じます。連絡がいつも遅れ申訳ありません。

五月十八日、氷河中段の仮C IIキャンブを移動し、C IIを建設。以後五月二十日C IIIを稜線上に建設致しました。C IIの上段からC IIIへはヒマラヤヒダの間を通る急峻なルート。氷河の難易については私達は初めてでわかりませんが、シエルバ達がとても悪い道と云っている処をみると悪い氷河と云えそうです。

C IIIでは高度の影響よりも、プロパンガスが上る迄ラジウスを使用したため、ガス中毒にかゝる者が多かったのと、予想外に稜線は着水が続き、C IV建設迄一寸時間がかかりましたが、五月二十六日仮C IV、五月二十七日C IV建設を終り、五月二十八日

××××  
上高地山荘開設のお知らせ  
××××

昭和三十七年六月 日

社団法人 日本山岳会  
会員各位

上高地山荘の開設に当っては、会員各位の御協力により漸く一応の準備が出来ましたので御利用をいただきたく、使用規程を作りましたから御案内申し上げます。

収容人員は二十名位であります。寝具は目下十名分しかありませんから、寝袋など持参いたゞければ幸と思ひます。

使用申込等については、遠隔の方々には不便の点多いと思ひますが、発足の上で追々と会員各位の御意見なども伺って改正してゆきたいと思つております。

## ◇上高地山荘使用規程◇

社団法人 日本山岳会

(1)この山荘使用は原則として、本会々員に限り。但し本会々員以外の者であつても会員の同伴者に限り使用を認めます。

(2)山荘の使用希望者は使用予定日の二週間前に必ず往復ハガキで左記に申込みの上、使用許可を受けて下さい。

松本市大名町七二

日本山岳会信濃支部

支部長 高山忠四朗

(電話松本四〇八四番)

(3)右使用に際しては、

イ、使用者氏名・会員番号(非会員同伴の場合はその氏名)

ロ、使用予定期間(到着並に離荘期日)

には第一次登頂隊及サポート隊の永光、安間、鈴木、サーダーを送り込むことが出来ました。稜線上は大変風が強く午後になるとガスが出たり、雪が吹きつけたり、南の方の雲をみては悪い方に解釈したり、はらはらしましたが、第一の岩場を越えてCIV、それからすぐ上部の岩場の開拓にかかりました。五月二十九日は、鈴木、永光、安間、サーダー、パサン・プター(パサン・プターIV)がほとんどビバークの様な装備と、携行食で岩場上部に雪穴をつくり、五月三十一日、十三時間の登攀で無事登頂することが出来ました。頂上には、午後二時到着。氷の稜線だったそうです。



全図近付チヤムラン

六月一日、CIV撤収、CIIIへ。CIVには五月三十一日第二登頂隊の小林、久木村が登っていましたが、天候の気配が悪いため中止して撤収。  
六月二日CIII撤収、六月四日CII、CI撤収BC集結。

六月九日キャラバン開始、荷物はサーダーとシエルバ一名をつけてホング・コーラを下ろし、隊員はアンブラブチャ越えをしました。アンブラブチャ氷河へ越える処は雪がついていて、裸足のポーターを下すのは大苦勞、ポーターが雪目になったりして三日遅れてナムチュエに着きました。パンボチェ、ナムチュエ共に今はドムジュ(お祭)で、ロキシー、チャン攻めに会っています。往路はもとより帰路も遅れ気味なのでゆっくりしてもらいませぬ。

では詳細は帰国後報告することにして筆をおくことに致します。会員の皆様によるしく。  
(六月十六日付ナムチュエにて)  
北大チャムラン隊帰国  
チャムラン登頂に成功した北大チャムラン遠征隊の中野征紀隊長以下岡本丈夫、小林年、永光俊一、久木村久、安間荘、鈴木良博の各隊員は、去る八月四日未明タイ航空機にて、全員無事帰国した。

帰国に際し、同隊はネパール政府に対し一九六三年秋の西ネパール・ナルカンカール(七、三二五m)の登山許可申請を行い、登山許可を得た。同峰はサイパルの北、チベットとの国境領線上に位置している未踏峰で、チベット領内にあるともいわれている。(Y・M)

△その二V出発に際しましてはご理解ある援助を賜わり有難うございました。遠征隊一行はすこぶる元気で、六月十八日ペールのリマに到着、七月五日登山の根拠地ウアラスに参りました。

豪壮なアンデスの白嶺はすばらしく新たなフアイトを燃やしております。今年も我々が目指すアンデスには十一隊の登山隊が各国より入ります。明日からは第一目標の処女峰ネバド・チュルップ(五四九三米)に向かい、キャラバンを進めます。

早稲田大学ペルー・アンデス遠征隊  
隊長 吉川尚郎 隊員 鈴木 昇  
隊員 井口昌彦 隊員 村井 葵  
濱野吉生 近藤隆治

△編者付記V 早大隊は七月十八日チュルップ峰の初登頂に成功した。

早大・ペルー・アンデス通信

△その二V出発に際しましてはご理解ある援助を賜わり有難うございました。遠征隊一行はすこぶる元気で、六月十八日ペールのリマに到着、七月五日登山の根拠地ウアラスに参りました。

豪壮なアンデスの白嶺はすばらしく新たなフアイトを燃やしております。今年も我々が目指すアンデスには十一隊の登山隊が各国より入ります。明日からは第一目標の処女峰ネバド・チュルップ(五四九三米)に向かい、キャラバンを進めます。

早稲田大学ペルー・アンデス遠征隊  
隊長 吉川尚郎 隊員 鈴木 昇  
隊員 井口昌彦 隊員 村井 葵  
濱野吉生 近藤隆治

- (4)山荘使用者は使用許可書を必ず携行し、管理人にお渡し下さい。またこれと同時に会員証(当該年度のもの)を提示して下さい。
- (5)山荘使用申込みの後、中止または予定を変更した場合は直ちに信濃支部あてその旨を御通知下さい。
- (6)山荘使用者は離荘に際し、左記の使用料を管理人にお支払い下さい。
- 会員 一泊四〇〇円(朝・夕二食付)  
非会員 一泊六〇〇円(朝・夕二食付)
- (7)山荘使用者各個人の自炊は御遠慮下さい。
- (8)山荘は開設早々にて諸設備は不十分であり、食事も、飯、汁の他は準備致しかねますから副食物を携行して下さい。追々に充実致しますが、本会クラブ・ルームの延長としてふさわしい雰囲気を保って下さい。

記 (七月二十日現在)  
一、申込件数 四六〇口  
一、申込金総額 金二、五五二、二五二円也

ルーム並に山荘基金の報告  
収容人員 二十名まで  
主要設備 寝具十人分、浴槽  
管理人 バス開通期間は常駐。  
以上



— 窓 —

上田 哲 農 画

## 黒部の岩登り

冠 松次郎

最近に埼玉眞飯能町の直登会の大野明君から報告をいただいた。それによると、同氏の一行三人は、下の廊下の黒部別山中央部の大山壁の登攀に成功されたようである。左に氏からの手紙を抜いて見る。

× 「先生の黒部溪谷に関する紀行、記録、何時も読ませて戴いております。特に剣沢及黒部別山周辺について興味をもっておりましたが、黒部溪谷完測記のなかで黒部別山東面の岩壁にふれられた玉文に強い刺激を受け、一度はあの磨ぎつくされた大岩壁に取組んでみたいと思っておりましたところ、幸其の時を得まして、去る六月六日待望の岩壁に相對することができました。

取付点は後立山側新越沢の落口對岸を一寸降った所ですが、上部の様子も地形も充分な偵察もできず、とも角ぶつつかって見る事にしました。一夜のピヴァーク

で七日黒部別山の頂に完登し、わかったのですが、下部は滝のある谷状、中間部は「ナダレ」に磨ぎつくされた大スラブで、上部が奥壁と大きく三段に分けられ其の中に多くのルンゼが切り込んで居て非常に複雑な地形を成しております。あまりにも大きい故、つかみ難い事も事実です。いづれ詳しく記することにし、完登の報告と御礼を申し上げる次第です（以下略）

この黒部別山中央部の山壁は、下の廊下でも最も長大なもので、幅一、〇〇〇米、高長一、五〇〇米のもので、一度や二度ではほんとうに全貌をつかみ得ないほど大きい。しかしその地形が如何にも親しみやすくとりつきたいような気持の岩場である。下の廊下を歩いているとき、何時も気になつていたのはこの中央部の山壁で、私の宿題にしていた処だが、生憎大東亜戦といふ大きなギャップを生じ、それが落ちついた頃には六十才を越える老齢で、嶮峻な岩登りなど覚束ないことになった。それを若い人たちの活躍によって、今日なしとげられつつあることはまことに喜びに堪えないことである。

最近のように交通機関が奥まで入り、一日で黒部別山の東下まで行けるようになつたので、これからは恐らくこの方面の岩登りが盛んになることと思われる。

穂高の岩登り、剣岳の岩登り、鹿島槍の岩登り、そしていよいよ黒部の岩登りにまで進んで来た。

下の廊下は兩岸とも岩壁に囲まれているから何処から見ても岩場でない処はない。奥鐘山を初めとして南仙人の大山壁、剣沢の大滝をめぐる壁、黒部別山中央部の壁、大タテガビン、赤沢から猫の耳に登るスラブなど、下ノ廊下は壁だらけである。ダムができ廊下の流れは細り、風景は落ちたが、谷を横ぎることが容易になり、大きな壁の世界が私たちの前に展開された。そういう意味で、今後下の廊下は実によい岩と壁の道場となることと予想する。

(昭和三十七年六月)

## 前穂高の古道ウエス トン・ルートを通る

山崎 安治

前穂高岳への一般登路といえ、御存知のように岳川谷から登るものである。この登路も以前の一枚岩を経て登るルートでなく、数年前にひらかれた一枚岩の一つ東寄りの支尾根の重太郎新道が昨春秋からさらによく整備されている。

この岳川谷から一枚岩を経て最初に前穂高へ登ったのは、明治三十八年九月十二日、鶴殿正雄氏が、鳥々の初作という袖を案内とした一行五名で上高地から往復したとい

一、払込済額金 一、八七三、二〇〇円也  
一、申込者氏名 別記の通り  
東京支部

木下是雄、折井健一、神保信雄、中村文吉  
松平直孝、大森藤政、増田繁雄、浅井秩夫  
市川次良、高橋忠太郎、岡村治信、和崎俊  
雄、田部重治、辻 莊一、増本 茂、武智  
直道、林 悌助、武藤 晃、齊藤長寿郎、工  
楽英司、日高健二郎、松浦謙助、林 和夫  
小林幹三郎、村上昭三、早川種三、名須川  
浩、後藤大策、橋本竜伍、日高信六郎、小  
野利次、鈴木英一、寺村栄一、陳 光漢、  
木村勝久、小林誠一郎、室越昌男、近藤信  
行、長島春雄、小田部 学、額田 敏、橋  
本 正、太田 敬、樋口博一、茶谷東海、  
高野鷹藏、浜中慶子、鳥居鉄也、安斉正明  
西丸震哉、三上公也、田辺主計、足立源一  
郎、太田耳助子、国司吾郎、錦織保清、浜  
口巖根、國分貫一、山本俊冬、外山義夫、  
加治甚吾、三枝礼子、石原憲治、深堀鉄男  
飯島正一  
町田立穂、河野幾雄、荒木正弘、鳥山徳成  
稲垣純男、安彦六郎、瀬名貞利、私たちの  
山登り執筆者一同、浜田一馬、三木正一、  
中村文次郎、中村元次郎、見学 玄、徳永  
登喜雄、米田文郎、登坂信雄、村尾金二、  
細川沙多子、勝田房治、山田 力、川崎精  
雄、吉沢一郎、鈴木耕治、ブルーガイドブ  
ックアルプス縦走執筆者一同、日本歯科大  
山岳部、中 保、竹内 堯、原口 亨、  
金子賢三、青木美代、萩原邦一、関本一男  
梅沢 寛、松本熊次郎、山口節子、神谷恭  
深田久弥、山本 祝、大工原欣一、筒井計  
男、篠原敏弘、北村二郎、室井 晃、高橋  
博、又木周夫、佐々木 誠、山口国俊、友  
野正雄、上林 康、高橋一雄、大井正一、  
岡安正光、小沢重男、富田美知子、長谷部  
昭久、白田昌一、山本良子、早川瑠璃子、  
森本智津子、三井銀行山岳会、角田吉夫、  
福井正吉、松田雄一、橋爪幸達、島 澄夫

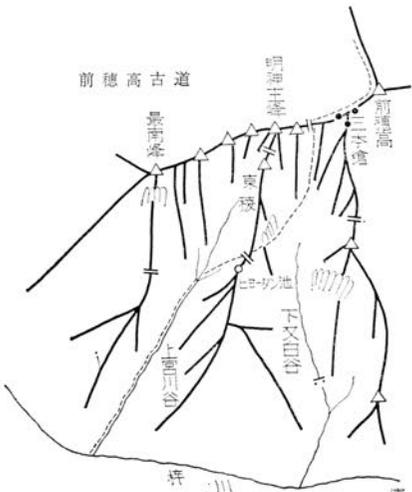
う記録が残されている。当時穂高連峰には現在のような名称はつけられておらず、現在の前穂高あたりが単に穂高山と呼ばれていたにすぎなかったが、この前穂高へは、すでに明治二十六年八月陸地測量部の館澤彦測量官によって標点が設けられ、明治二十八年には高井鷹三測量官により造標が、さらに翌明治二十九年には三輪昌輔測量官により観測が行なわれている。

登山者として最初に前穂高に登ったのは、明治二十六年八月二十五日、館澤測量官の登山の二週

間後、上条嘉門次を案内として、ウエルトン師により極められていた。当時前穂高へ登るルートは、上宮川谷より明神岳東稜を下又白谷にこえ、これをつめて東

面より前穂高に到ったものであり、このルートの模様は、ウエルトン師の「日本アルプス登山と探検」の第九章にくわしく述べられている。また、明治四十二年八月、はじめて穂高・槍の主稜縦走に成功した鶴殿正雄氏一行も、前穂高へ至るの到下又白谷からのルートをとっている。

このルートは嘉門次によって開拓されたものといわれているが、明治の末期には、すでに廢道となつてしまつたようで、それからすでに半世紀以上をへた現在、この由



緒ある前穂高への古道は、まったく登山者から忘れ去られてしまつてゐる。

この六月二十一日、小生ら一行三名の隊（杉山桂吉、會員、芥田純一、カメラマン）は、午前七時五十分徳沢園を出発、この下又白谷からのウエルトン・ルートの踏査に向つた。梅雨中にもかかわらず前日は雲一つない快晴で、岳川の河原でのんびり遊び徳沢入りをしたのだが、この日は曇り、穂高の稜線は黒々とそびえており、なかきょう一日は持ちそうであつた。シーズ

ンたけなわともなればキャンパーでひしめきあふ徳沢一帯人っ子一人見えず、静寂そのもの。新村橋をわたり、下又白の出合をすぎ上宮川谷の下に出る。ウエルトン師の紀行には水が流れて

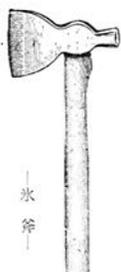
いたと述べられてゐるが、このあたり今はまったく伏流となり、一面針葉樹の巨木が密生している。しかし下生えは熊笹で、出合付近はそれほどひどい藪ではない。登るにつれ、倒木をこえたり、かなりの藪こぎなど強いられる。もう二十年以上前の三月、このあたりにベイス・ハウスと称する仮小舎を設け、明神東稜に登つたことがあつたが、仮小舎をどこに作つたのか見当もつかなかつた。木の間にぐれに明神主峰とおぼしい岩峰が望まれはじめる。木立もよう

やくまばらになつてガラ場にぬけ出した。わずかなふみ跡をたどつてひょうたん池の鞍部に出たのは正午をわずかまわつていた。東西にくびれて伸びている細長いこの池はまだすっかり雪に覆われていた。

明神の東稜を一枚岩の基部まで登り、そこより下又白谷へトラバースを開始する。一度下又白の中までおつてしまえばよいのかも知れなかつたが、高度をへらすまいとほとんど真横にわずかずつ高度をかせながらのトラバースは、なかなか大変であつた。岳樺やナナカマドなどの灌木をわけて進む。一枚岩の奥又面に面したかなり広いテラスのあたり一輪の黒百合が咲いていた。

四年ほど前の冬、東稜の馬の背のピークの下から雪崩に飛ばされて落ちた四名の若者たちも、恐らくこのあたりをすさまじい勢で落下していったのだらう。しばし黙符をささげる。あまり高くまきすぎたのでついにスラブにつき当り、ピトンを打ち十五メートルほどのアップザイレンで下の雪渓におり立った。雪渓を右にトラバース、主流とみられる雪渓をどどんとつめ奥明神沢のツメに出たのはすでに午後五時であつた。途中からバラバラ霰まじりの雨がふり出しいつか本降りとなつた。五時五十分前穂頂上についた。途中写真をとつたりしてゆつくり遊んだためこのルートからの前穂登山はかなり時間を要したが、全くひと気のな

(三七・六)



氷斧

- 吉田英吉、鶴岡元之助、加藤元一、松橋秀次、慈恵医大 山岳部、佐藤久一朗、池田光二、日本勧業銀行、山崎安治、木原均、小島隼太郎、フェルス。井上匡史、竹島正義、石井鶴三、吉田 薫、高木菊三郎、海老沼 清、村井米子、中村 謙、藤島敏男、浅原重継、野口末延、田村扇一、船越好文、堀田弥一、本多紀元、府川 裕、原田幹市、青木 昇、和田一男、杉山 孝、中川義夫、吉田竹志、山口一孝、冠松次郎、今井嘉道、織内信弘、岩佐吉雄、中島伊平、佐藤佳年、下条富弘、東谷支那、小倉勝男、近藤茂吉、宇田川允敏、防衛大山岳部、今井雄二、立教大山岳部、早川義郎、三枝守博、日本興業銀行、吉田 功、小林義正、川俣俊一、水田健之輔、杉浦耀子、湯本武雄、坂本矩祥、坂倉登喜子、今井喜美子、中村清太郎、小川のり子、石坂昭二郎
- 山一証券、初見一雄、今村正二、田中正智、玉置誠一、エーデルワイス・クラブ、松方三郎、岡登徳之助、橋本晋七郎、野田光朗、諸岡一次、島田 巽、島田史朗、東大スキ一山岳部、金坂一郎、古沢 肇、沼倉寛二郎、東京女子大、岩永信雄、山田和雄、日本極地研究会、木村義昌、三木正一、神原達、高橋英彦、山晴社、佐藤久一朗、小石川高校、馬場勇象、協和銀行、交野武一、川村博道、徳久球雄、関口周也、加藤泰安、渡辺嘉男、鈴木羊三、竹田吉文、日本長期信用銀行、川上 隆、入沢文明、田口三郎、助、佐藤隆太郎、早稲田大学山岳部、中村光伸、川泉 毅、長沼真澄、横田敬一、千谷壮之助、大熊良幸、阿達 憲、細井隆司、金子泰助、中村光三、稲葉二郎、高橋 博、佐々木健太郎、渡辺武男、川津鉄礼、小原勝郎
- 関西支部  
大島輝夫、稲岡建城、山田二郎、水野祥太郎、永谷義三、藤木九三、前田 浩、萩原

## 関口泰氏と私

瀬名貞利

「瀬名君に山の本を出すから序を書け」と云はれてすぐ引受けてしまったが、私は自分の本に序を書いて貰ふこともあまりないし、他人の本に序を書いた事など一度もない。それをツイ引受けたのは「社会及国家」の編集を長いこと一緒にやってきたお馴染ばかりでなく、山やスキーや小鳥や音楽でいつも御高話を拜聴してゐるので長らくのお付き合いや、その外の三百年來の因縁がそこにはあるからである。といふのは、私の先祖の関口氏広なる者が瀬名家から養子に來てゐるのである。その氏広の娘が今川義元の世話で東照公の家へ嫁入つてゐる。(中略)そんなこと他人様と思へないのである」

これは昭和十五年に出版した拙著「山の組曲」に関口泰さんが書いてくれた序文の一節である。この文にもあるように「社会及国家」という厳めしい評論雑誌(良い時代で広告を一切とらずに非営利的に出した月刊誌で玄人筋の評判は大変好かつた)の編集会議で毎月関口さんにお会いし、又同氏のペンネームが瀬名黙太郎であつたら親しみを覚える一方、何故こんな名をつけられたか不思議に思った。この雅名で本職の政治評論は勿論、美術批評や音楽批評を方々に書いて居られた。学校出たての頃の私は、勤先の上役細貝さんからこの雑誌を

出した結社「匡社」に入会させられて、何も判らずヤジ馬的に編集のお手伝をしていたわけである。その頃勤先の或部長はこの黙太郎氏の政治評論を読んで感心し「瀬名」という男は理学士だのに政治のことに仲々詳しい」と驚いたことがあつて私を恐縮させた。

そんなことでも関口さんに対する親近感には強くなつた他に、泰さんの従弟の関口隆克君(今は文部省の教育研究所長)とは一高以來の友人であつたし、それよりも先ず泰さんの新聞人には珍しい穏和な温か味のある風貌が非常に私を引付けたものである。

この種かな関口さんが一度筆を執つて政治評論を書くときと実に鋭く時の大臣達も完膚ないままでやつつけられてしまう。

編集会議でも時には山の話も出たが、山の方ではその頃夏には盛んに北アルプスに登つて居られた小林俊三さん(前最高裁判事)が私の直接の登山の先生であり、山の話という小林さんが中心であつた。勿論関口さんも時折山の話もされたが、故郷の静岡方面からの南アルプスに関する話だつたように憶えてゐる。然し関口さんはその頃暇があれば、赤城山の洞に猪谷六合雄氏に設計して建てさせた山荘に行つて居られ、赤城の話はよくされた。誰かが「よくそんな山に行く暇があるね」とひやかしたら、ニコリして「六無齋ではないが他に何も無いから、暇ぐらいなくてね」と答えた。

昭和の初期に初めて前橋からバスが赤城の一杯清水まで通うようになった秋、私は単身この猪谷旅館に泊り、運よく紅葉の最盛期に遇い非常によい印象を受けたので

すっかり赤城ファンになつたので、その点でも関口さんと大いに話が合つた。それに私が野鳥に興味を持ち始めた頃、七月の赤城山でトラツグミ(鶺鴒)を聴いた話などから、もう一度野鳥を聞きに赤城に行きたいというとき、関口さんはそれなら一度私の山荘に來ないかと誘われ、或年の六月関口さんのお伴をしてその山荘に泊めて貰つた。

流石に猪谷氏の設計だけあつて小さい山荘の中が実に住みよく出来て居て、一階は倉庫と風呂場だけで二階の入口はバルコニー風でここで煮炊きも出来る。部屋に入るとベッドは棚になつて居り、机も抽出を開けるとそれが調理用の「流し」となり、長椅子の上をはずすと一階へ降りる階段が現われるという具合で、全くスペースの無駄がない。一階は関口さんが時々大沼で漕ぐスカールの庫になつて居た。この山荘は湖畔にあり大沼を隔てて黒槍岳が正面に聳えて居り、環境も実に申分ない。東京ではその名の通り泰然として何もしない旦那に見える関口さんが、ここでは実にマメで自ら飯を炊き料理をされる。無精者の私も黙つて見ている訳にはいかず、何かとお手伝をして「ここへ來ると皆よく働くようになるよ。O君なんかここで働いた癖がついて、家へ帰つてもよく働いて細君に褒められたそうだよ」と笑つて居た。翌朝大いに期待した野鳥が雨や風に祟られて大したことは無かつた。前述の序文にも「色々鳥の声を教つたが覚えてゐるのはキビタキだけである」とあるが、山荘のすぐ裏の繁みで夜明け前から美しい声で囀つたキビタキは関口さんにも強い印象を与えたようだが他の鳥はあまりよく鳴かず少々失望した。

その後「山頂漫歩」を出版され又「山湖

- 邦一、佐藤耕三、野地竜夫、大木保太郎、津田康祐、高木正孝、清水、昭、三木、亮、藤田、博、オニツカ株式会社、永井俊三、福田耕平、寺本、澁、水野政博、大賀寿二、浅野清彦、田辺多聞、本間克彦、船木、匡、秋月良造、田中栄蔵、余部守男、片山英一、阿部和行、川口善三、川勝弘一、村田数之亮、平林克敏、伊藤幸一、富田健一、桑原、武夫、中原繁之助、松井啓祐、福田勝一、梶本徳次郎、江越千代子、小崎司郎、陰地、章、寺田鬼久磨、山本吉之助、今西寿雄、内山正二郎、山田二郎、増岡清史、広瀬伊三郎、松丸秀夫、岸田権二、篠田軍治
- 山形支部  
後藤三郎、森、茂八、後藤恵治、後藤幹次  
島中善哉  
秋田支部  
徳永芳雄、高田俊雄、荒巻広政、奥山文次  
宮城支部  
坂本雄吉、渡辺昌一郎、伊達篤郎、四倉源一  
福島支部  
鈴木義彦、三森幾二郎  
越後支部  
室賀輝男、細見和夫、井口正男、藤島、玄、竹内満雄、中村一雄、五十嵐、力、石田、夫、小柳誠吉  
信濃支部  
清水信郎、吉武正子、百瀬、孝、栢植日出夫、永田好行、井口謙司、小山、智、朝倉、雅美、島田、哲、藤森元夫、神村明徳、百瀬一茂、馬場忠三郎、冨浜親男、若浦義弘、小里頼忠、保科文人、浅輪幸夫、吉原和美、沖、弘二、大須賀、浩、村上、守、河西弥一、川西山岳会小山正俊他五、稲葉二郎、牛山六六、山田平三郎、大町昭電山岳部、原、喜彬  
山梨支部  
秋山英二、小田和友蔵、竹下礼子、今井友之助

「隨筆」を書かれて、その都度寄贈を受けた

が、その以前から短歌を作られたようであ

る。「山頂漫歩」の見返しに「上つ毛の赤

城の山の裾ながに我が思ふこと遠くはてな

し」と書かれたが、之は泰さんらしいおお

どかな美しい歌だと感心した。この本には

短歌の評論は載せてあるが、自作の歌はな

かった。山湖隨筆の方には大部歌が載って

いて楽しかったが、大分遠慮をされたらし

く一章の終りの余白になる所へ埋草的に十

首位目白押しに印刷されてあるので、短歌

鑑賞の点では物足りなかった。この頃から

編集会議以外で関口さんに会う機会がもう

一つ出来た。というのは、小林さんや私な

ど極く気の合った仲間だけで短歌会を作り

これに関口さんも参加され、毎月一回歌会

を開くようになった。ここでは関口さんの

詩人的の半面がよく現われて、兎角神経質

ことを書いて居る。

「山岳」の第一号が出た頃の山登りだ

から先覚者には違ひないが、同時に早く

からの落伍者であった、それだから低回

趣味が流行らなくなつて「山岳」が科学

的記述になり、登山者が縦走だの新コー

スだのと元気のいい所を競ふやうになつ

ては、もう我々の出る幕はなくなつた。

それから二十年たつて今はもう殆傍で昔

語りをする老翁の役まはりである。又、

「私が「山岳」へ麓岳と尾瀬ヶ原の事を

書いた時分は長蔵小屋は出来たばかりで

まだ閉めてあつた。」

これを見てもう山には全然登らないよ

うに思えるが、赤城は別として今度の大戦

直前まで夏は親戚の若い人などと時々登山

して居り、時にはこんな話を聞かされた。

或る秋の会合での話にその夏白山に登つ

た降り道で熊に遇つたそうだ。又ある時は

「この夏は尾瀬でオカンをしてね」とい

われるのに驚いて何故そんな事をされたん

でと尋ねると、銀山平から尾瀬の三条の滝

の方へ抜けるつもりだったが、老眼で地図

を見るのが面倒だから、連れの若い者に地

図を見させ、多分好いだらうと歩いて居る

内にすっかり迷つて日が暮れたから仕方が

なく、オカンさ」と例の通り少しも困つた

様子もなく話された。然しあの年齢でオカ

ンして別に身体にも障らなかつたのは、さ

すが昔とつた杵づかである。

亡くなられる一年位前から健康を害され

時々入院されていたので最後にお会いした

のは、例の短歌仲間数人で前年の暮（昭和

三十年十二月）に鎌倉山之内の御宅にお見

舞した時であつた。この時は憂うつな面持

で以前の様な笑顔が消えてしまい、長居を

×

×

して御病氣に障つてはと心配して早々に引

上げてしまつた。

もう亡くなられてから六年になるが、私

の眼底にはやはり元気な頃の御顔が残つて

居り、戦後国立公園のことで日本各地に出

張され旅の歌を盛に詠まれた頃の姿が思出

される。或時麻布の伊吹邸で歌会を開いた

ら、その日の朝福岡から航空機で帰京し、

その足ですぐ会に現はれた時や、鎌倉浄智

寺谷の御宅で歌会を催して、庭でとれた八

朔蜜柑を沢山出され、又益子夫人の懐石料

理をご馳走になつて、春の花の多い庭園を

眺めながら歌作三昧に半日を過ごした頃の

泰さんでありありと憶い出すばかりであ

る。懐しいままに筆を執つたが色々の感慨

が胸中に湧きながら仲々思うように筆がは

こばず、とりとめのない一文になつて恐縮

である。ここに深く泰大人の御冥福を祈つ

（昭和廿七年四月卅日記）

（付記）・山頂漫歩 昭和十一年、書物展望社刊、六百部

限定版、後昭和十八年一部内容に変更を加へ「新装登高

と改題して那珂書店より刊行。

・山湖隨筆 昭和十六年、那珂書店刊。



川喜田社太郎

静岡支部 安達美冬里、山本朋三郎、牧野 衛、石間

信夫、野田福五郎、片山欣也、青島秀夫、

河村栄二、静岡支部

東海支部 伊達忠雄、小笠原三郎、神谷真吾、住 広

達、村井喜一、沖 弘二、中村慶蔵、小原

達、須賀太郎、境野俊男、山本光二、川喜

田社太郎、柴山乙彦

富山支部 植木忠夫、上野博基、吉川良平、中田勇吉

木津誠一、中野峻陽、宮西久吉、牧野平五

郎、石黒清蔵

石川支部 池田知幸、亀田与三次、山下久夫

福岡支部 堤 甚五郎、堤 甚五郎、高場常雄、田中

昭男、秦野一彦、柴田重太郎、江上 康、

熊谷松雄、月原俊二、三上忠人、伊藤幸次

末松大助、小林義明、浦田 勝、江口重幸

田代 実、松村周典、橋本三八、園川陽造

仰木政次郎、高尾繁徳、福永一郎、村上巖

内野幸男、石田登規男、吉村健児、松本征

夫 大分支部 橋本富夫、永井清一、加藤数功

熊本支部 馬場 猛、西沢健一

その他 神山隆之、高橋文一、高杉正樹、尹官 炳

桑田信道、井上公利、森谷昭男、梯 安夫

伊藤秀五郎、笠原潤二郎、中野征紀、奥田

五郎、大森董雄、中藤 剛、長沢 悟、山

野井武夫、高沢光雄、阿部国雄、望月達夫

奥井 清 以上

△会 計 村 上 〃

まだお申込をいたさない方、お返込のお済んで

ない方は、どうぞお早目にお願ひします



茨木猪之吉

## 図書紹介

することである。つぎに「部の歩み十五年」の題のもとに、昭和十八年以降三十四年までの登山記録のうち、夫々の時期での中心的な登山を五つにわけて述べている。その冒頭にかかげら

昭和十一年九月に第六号を発行して以来まさに二十六年振りの刊行である。四七〇頁余の大冊となったこともやむを得なからう。

その中で一〇〇頁余を占めるのが一九六〇年に行われたマッキンレー遠征の報告である。隊長交野武一氏ほか隊員が分担執筆したもののだが、細かい点までよく行き届いた読みごたえのある報告である。特に高橋進氏のアラスカ日記は、適度のやわらかさも有り登山記としてもすぐれている。読者は、初めてアラスカに赴いた人々の、ヒマラヤとはまた異った数々の苦労や、五月五日第一回の南峰登頂時に見られる隊員のフアイトなどに少なからぬ印象をうけるであろう。また、その後マッキンレー南峰頂上に幕営したことも特記に価

れた大塚博美氏の「ふみあと」は戦中戦後の極めて困難な時代の記録で、貴重なものと思う。なお、この項の末尾には昭和二十一年と三十四年の山行記録が五〇頁にわたって添えられている。

また、この期間には不幸にも惹起された四つの遭難報告に、追悼文も含めて五〇余頁がさかれているが、古いものもよく整理されているし、「積雪期の遭難について」という研究と共に貴重な資料と思われる。

最後にOBによる随筆が「いろいろばた」の項目で十篇集められている。部外者が読んでも夫々に面白い。本学のOBで本会の理事でもあった故高橋文太郎氏のことにもふれた一篇もあったが、同氏のこととはもっと詳しく書いて貰いたかったことである。

ともあれ戦争を含めた二十数年間の部の記録を整理することは、

大変な努力が必要だったろうと思う。しかも本の出来栄は、広羽清氏という有能な編集者によってなかなかスマートでさえある。ただ写真が概して小型なのは小ささか残念で、一頁大ぐらいのものも二、三ほしかつたと思う。写真を使った表紙は従来の山岳部々報の型を破ったいき方だが、これも悪くない。(望月達夫)

A5版四七六頁 横組み 昭和  
三十七年三月発行

### マチャブチャリ

——ヒマラヤで一番美しく  
峻しい山——

ウィルフリッド・ノイス著  
深田久彌 訳

ノイスの名著 *Climbing the Fish's Tail, 1958 by Wilfrid Joyce* の邦訳である。サブタイトルがないと分かりにくい、本書は一九五七年の初夏に中央ネパールの未踏峰マチャブチャリ峰(六九九八m)に挑んだ英国の登山隊の公式報告書である。

ノイスの文章については、エヴェレスト——その人間的記録(浦松佐美太郎訳)以来定評がある。

そのノイスがエヴェレストの次に切望した登山は、小規模な隊で気心知れた仲間と再びヒマラヤへ戻ることであった。本書の第二章にも「以前私がガルワルやシッキム

やカシミールへ行つた時の様に、小さな規模でかの魅力あるヒマラヤへ戻る事ができたなら、私の夢は完成するだろう」と述べている。そしてかけたのがこのマチャブチャリで、この時の報告を前著サウスコル以来待望していた読者の間に公刊したので、この *Climbing the Fish's Tail* である。その邦訳は原著が出版されて以来、長らく待たれていたが、その邦訳がついに出版された。しかも訳者が、ノイスのよき理解者であり、共通の理想をもっておられる深田久弥氏であったことは私にとって、大きなよろこびであった。かつて私が会報二一一号に「ネパールの高地にて」の紹介を書いた時にも、「ヒマラヤの紀行文の翻譯には、著者と訳者が共通の気持をもっていることが理想である……」という主旨のことをかいたことがあるが、本書についても、この意味ではまことに申分ない訳者を得たことになる。

マチャブチャリはポカラの飛行場の真正面にマッターホーンの様に見えるので、今日ではかなり有名な山である。日本隊にとってもマナスルやヒマルチュリの帰途必ずみているので、よく知られている山の一つである。そしてこの山については私にもなつかしい思い出があった。マナスルの登頂に成功しての帰途ポカラの飛行場で、た

またマチャブチャリの偵察から帰ったというロバーツに会った。その時の私にはマチャブチャリの登頂の可能性については余り考えたこともなく、むしろ気楽な気持ちで彼に聞いたつもりであった。しかし彼の返事は「マッターホーンより難かしいだろう」という様な曖昧な答えであった。そして翌朝一番の飛行機であつたとカトマンズへ飛んでいったのである。本書の第一章背景と偵察については特にロバーツが筆をとっているが、その中にこの時のことが次の様にかかれていた。

「ポカラに帰ってくると、大きなニュースが拡がっていた。日本隊はマナスルに登頂して今なお飛行場にキャンプしていた。スイス隊はローツェとエヴェレストに登頂していた。アルゼンチン隊はダウラギリに登頂したと登らなかつたとか。誰もがネパールの山に登ろうとしているように思われた。そこで私は、誰かよその侵入者が厚かましくもマチャブチャリ登山の許可を得てしまわないように、大心配で直ちにカトマンズに飛んだ……」この文をみて私は当時を回想して思はずニヤリとしたのであった。

マチャブチャリの開拓者はロバーツ少佐(当時)であった。長いこと第二グルカ軍にあってグルカ兵と生活を共にしていた彼は、彼等の出身地グルン族の山と、その

住民を愛していた。シェルパを愛し彼らの住む土地にあこがれた者は多い。しかしグルカ故郷にあらがれ、彼らの山に登ろうという気持をもつことはロバーツの様な人でないと中々できないことである。こうして彼は自から偵察にかけ、隊を編成したのであった。

一方ロバーツは、マチャプチャリの技術的困難さを認め、自から一九四七年以来のアルプス登山のプランクを上げ、

「マチャプチャリは高級技術の能力を要求しそである。それ故に私が登山隊を組織し道筋を指示する一方、山の上は誰か他の者が引つがねばならないだろう。そしてその登山のリーダーはウィルフリッド・ノイスであった」とのべている。こうしてロバーツは山に入

る（それは正しい）。しかし本当ならばそれはジェームス・ロバーツの役である。彼は最初にこの登山を心に抱き、それから隊をまとめたリーダーであり、一九五六年長い北尾根を攻撃しようと計ったほど、彼の熱の入れ方は大胆であった」と記している。

「なぜ私がこれを書くか、それは私が他の隊員から文筆という弱点を持っていると思われたからであ

る（それは正しい）。しかし本当ならばそれはジェームス・ロバーツの役である。彼は最初にこの登山を心に抱き、それから隊をまとめたリーダーであり、一九五六年長い北尾根を攻撃しようと計ったほど、彼の熱の入れ方は大胆であった」と記している。

通する点が多い様である。

しかし乍ら文中至るところに詩を引用し、シエクスピアその他の名句を引用しているのはさすがにチャーターハウスの教師ならではないことである。一般の人がその様な書き方をすればややもすればキザにみえるのに、ノイスが書けば、そして深田さんがそれを訳すと、ごく自然にしかも一段と引立つのは、ノイスの風格のしからしむるところだろう。

尚本書の写真もすばらしく、付録の形で採録されている「心の戯れ二つ」という散文の内容と、そのサブタイトルの「その責任はマチャプチャリにある」というのも面白い。ロバーツの筆になる二つのノート「許可と通関」「マチャプチャリの綴り」も大変参考になる。

(松田雄一)

(B6版、本文二〇一頁、写真一二頁、地図二葉、昭37・6、文芸春秋新社発行。三九〇円)

追記

七月三十日付ロンドン発のロイター電によると、ソ連領バミール高原に遠征していた、英ソ合同登山隊の英国側隊員、ウィルフリッド・ノイス(43)、ロビン・スミス(23)の両氏は、ピーク・ガルモ(六、六一五m)に登山中遭難死した模様である。この情報は同登山隊の英国側隊長サー・ジョン・ハント氏からもたらされたものである。こゝに謹んで両氏に哀悼の意を表す

(松田雄一)

## 関西学生山岳連盟 報告第十一号

戦後復刊して三冊目のもの。戦後版はA5となったので、戦前の大きな判とならべるとつりあいがとれないが、内容は依然活発に関西学生陣の動きをつたえているのは頼みしい。

内容は、積雪期黒部(阪大・京大)、利尻岳(同大)、剣岳八ツ峰一峰東壁(阪大)、春の剣岳合宿報告(関学大)、冬山における凍事故報告(関大)、黒難川柳又谷湖行記録(京大)、一年生の山行(大工大)、御岳摩利支天南壁(岐阜大)、記録ノート(京大)連盟ノートとなっており、一九五九年四月から一九六〇年三月までの主要な行動を要領よくまとめられている。中でも阪大、京大隊による黒部源流のトレース、薬師岳東面の記録など貴重なものである。

阪大による八ツ峰第一峰東面の報告も面白いが、ここはすでに昭和の初期、旧四高パーティによってくまなくトレースされており、その記録はベルグハイル第五号のついている。くわしいスケッチ・マップもそえられているので、これを参考に名称など統一して書かれたらより一層よかったのではないかと思う。

復刊三冊目ようやくこの報告も軌道にのってきた感じである。

山登りそのもののゆきかたが、今後ますますむずかしくなつてゆくと考えられるが、これをどのように解決してこの報告へもりあげてゆくか、AAVの今後の活躍に期待したい。(山崎安治)

昭和三十六年十一月三十日関西学生山岳連盟発行、一四一ページ、定価二百円。希望者は大阪市北区老松町三ノ二、日新ビル好日山荘内同連盟宛申込みよ。

東京電力の梓川水力開発計画のPR映画「流れ」の試写会が七月十七日銀座のヤマハ・ホールで開かれた。PR映画といっても、安曇野と梓川と上高地と、さらに槍穂高連峰の四季を、ヘリコプターまで出動させきわめて立体的によくとらえている。総天然色のシネマスコープをおしてみるこれらの自然の風物は、われわれが不断みられたものとは別の角度からあらわれ、まったくフレッシュに梓川をとりまくそれそれの美しさをあますところなくみせてくれた。

そしてこの水力開発計画に関する限りでは、上高地から上流の風物にはなんの影響もないことがなっとくできたことも、われわれ登山者にとって一つのなぐさめとなる。イーストマンカラー、全四巻共同国際映画社製作。(Y)

× ×

× ×

× ×

× ×

× ×



飯豊連峰山開き

山崎 安治

第四回飯豊連峰山開きと、昨秋新設された門内小屋開きをかねた池の平峰行と門内岳登山が七月七、八、九日の三日間にわたって行なわれた。地元黒川山岳クラブ、中条山の会が主体となり、これに山岳会越後支部、映彩山岳会の後援で、東京から小生と東京支部の錦織保清氏が参加した。

第一日は黒川農業研修所で十時半から山開き安全祈願祭、昼食後総勢七十名余り、トラックに分乗し椿平野営地にキャンプ。

第二日目、昨秋完成したという立派な頼母木川吊橋をわたり、樞の密生する登り降りのはげしい胎内屋根にとりつく。藤島支部長、支部の佐藤一栄氏、それに地元の名案内として知られる井上藤七さんと一団となり、最終尾からのんびり登ったが、とにかく暑いのは閉口した。小生にとってはじめてのところにだけに、見るもの聞くもの珍しいものばかり。胎内屋根はよく道がつけられている。三十九年の国体コースとなるそうだが、これまでの遊び半分の国体登山とことなり、かなりのアルバイ

トを要求される本格的な登山となるのではないかと思う。尾根は思いのほかやせており、とくに東北面に非常に急傾斜の雪渓が残っている。錦織氏は池ノ平峰より引上げたが、小生はさらに門内小屋に向った。しかしあまりのんびりしすぎたため、われわれの一行は二ツ峰でついに時間切れとなり、藤七の池で遊び小桜の池まで引返して野営した。好天にめぐまれ、杖差から地神山、門内、北胎岳、大日岳と一望のうちにあり、まことに快適な山登りであった。

第三日目、野営地を引はらい滝沢峰、池の平峰をへて再び黒川村の農業研究所まで下り座談会に出席解散した。

藤島支部長をはじめ支部の皆さんに大変お世話になった。あらためてお礼申し上げる。

太郎兵衛小屋にて

小野 利次

立山薬師コースは午後になると必ず雷雨がやって参ります。十時頃になると、有峰方面に雲が湧き上り、忽ち霧は稜線を越えて黒部の谷に向けて落ちて行きます。

間もなく定期便がやってきて、山も谷も雷鳴に紛れてしまいま

す。入相い迫るころ一旦雨が上り黒部の谷に鮮やかな虹が懸ります。

夜の帳が拡がると再び沛然たる雨が横なぐりに降って参ります。目下雨と長距離レース中です。(八月十七日)

梓会の復活

茶谷 東海

終戦直後GHQの指令により解散した旧海軍唯一の山岳会たる元海軍経理学校山岳部梓会が元会員の年来の宿望に於いて去る八月十九日復活した。この日、名誉会長元教官田部重治氏を水交荘(旧海軍のクラブ)に迎えて第一回総会を開き、今後毎年一回総会を開くこと、日本山岳会及び防衛大学山岳部と緊密な連絡をとり親睦を図ることなどを決議した。

出席者は旧海軍に籍をおいた岡村治信、浜田一馬(いずれも日本山岳会員)、防大山岳部OB元島一尉、弘中三尉、村田三尉、元海軍経理学校出身会員約三百名中、世話人十五名。幹事は茶谷。

なお、日本山岳会及び防大山岳部との連絡は主として茶谷担当。右ご報告すると共に日本山岳会各位のご指導とご高誼を切に願います。次第である。

☆参加者が多ければ明年以降もつづきたい。地方の催しには東京から出来るだけ出席してほしい。

浜野理事 支部で講習会を行う場合はいつでも講師として何人か参加する用意があります。

折井理事 会報についてご希望があればお送りします。

⑦山日記編集について(皆川) ・今年も年内に刊行したいので、すでに編集に着手した。ご意見がありましたらお聞かせ下さい。

⑧高体連登山部について (徳久) ・当部として本会内に学生部のごとき形式のものをもりたいとの意向あり、七月に八ヶ岳において、文部省、高体連の共催で講習を行う。

六月理事会

七日・ルーム

▽松方会長、渡辺副会長、理事浜野、折井、山崎、木下、竹田、辰沼、古沢、皆川、田辺、徳久、高橋、村木、監事野口、関西支部高木、東京支部岩佐。

委任出席 川上、田村。 ▽議事及び報告 ①役員会運営について

・理事会の開催は昨年通り第一木曜日午後六時半より八時半まで。(時間厳守)

・常務理事、常任評議員会開催については、毎月二十日ごろ昼食時に開く、六月は二十一日(木)

②支部長会議開催について ・期日、七月十四日(土)午後三時より七時まで、場所、国際文化会館。

③日本山岳協会役員総会について ・役員改選 本会より松方三郎(副会長)、山崎安治(理事)を選任。浜野理事は大阪へ転勤のため退任。

・議案 会計報告(三十五、六年度)、事業報告、事業計画について。

④ウエストン祭報告 (折井) ・六月二日・三日

⑤台湾省山岳協会訪日友好登山隊の帰国について。(折井)

・六月十二日全員帰国。 ・なお同志社、早大ワングル、本会静岡県支部等数団体より訪台登山の希望あり。

⑥上高地山荘について(折井) ・使用規定が制定されたので詳細は会員に通知する。

(4頁記事参照) なお管理は信濃支部が行なう。常駐番人小林福松。

⑦フランス山岳会クラブインストラクターに会員岡村権、近藤等(在パリ)の二名を派遣する。

(折井)

⑧読売新聞社主催の立山で行なう登山講習会に共催の依頼あり。

⑩富士山美化清掃について (山崎)

・国土美化の会主催、第一回打合せ会に石原東京支部長が出席した。

⑩富士山頂研究所について (辰沼)

・例年通り七月―八月開設することに決定した。

⑩医療連絡会について (辰沼)

・厚生省より各山岳診療所へ支給される薬品類は連絡会で一括受領し配布する。

⑫図書目録(和書の部)完成について (徳久)

⑬山日記について (皆川)

⑭山梨支部百瀬舜太郎氏は県政功労者として表彰され、祝賀会が五月二十六日、甲府市談露館に於て開かれ、本会から渡辺副会長、折井理事が出席した。

⑮東京薬科大学山岳部創立十周年記念会(六月十七日)本会から辰沼理事出席。

七月理事会

五日・ルーム

▽出席者、松方会長、渡辺副会長、理事折井、山崎、木下、辰沼、竹田、金坂、古沢、皆川、監事野口松本、東京支部岩佐

委任出席 三田、中島、田村。

▽議事と報告

①ルーム、山荘基金募金について 六月三十日仮締

・口数 三百三十六口

・申込額 二百十二万八千六百円

・納入済 百九十八万八千六百円

・未納額 十四万円

・納入率 八十四%

・二二二号会報に寄付申込者氏名及申込額総額を報告、未申込の会員に対し申込の依頼及法人筋の寄付の依頼をする。(折井)

②本年度会費の納入状況について

・六月三十日現在、納入済二百八十三名。

③支部長会議議題について

・海外登山の経過報告

・支部より本部への要望

・山日記に対する要望、その他

④報知新聞社より「山岳遭難救助法、講演と実技公開」七月十五日於日本橋三越の後援依頼あり了

承、講師として山崎理事を派遣。

⑤新生活運動協会より「旅の新生活運動」の協賛、名義使用について依頼あり、承諾。

⑥七月十日開催予定の国体委員会に渡辺副会長出席の予定。

⑦会員章について (折井)

・戦前と同じ材質のものとするため見本を作り、これにより決定した。

⑧山日記について (皆川)

・各県の遭難予防に関する組織の調査をしたところ、二十七県に何らかの組織があることが明らかになり、相当量の資料が集まった。

・山日記のカットに山小屋を入れない。

・日記欄に日々の山岳史を掲載したい。

⑨ベースボールマガジン社より、登山入門書の執筆依頼について。技術委員会編とすることです承。

⑩海外遠征について

・七月十九日、ヒマラヤ委、技委、常務理事で次期海外遠征の計画を検討する。

⑪静岡支部の「中華民国訪問親善登山隊」について

・期日、十月一日―十月三十一日

・隊長山本明三郎以下八名

・台湾山岳協会他へ申請中。

▽日時、七月十四日(土)

午後三時半―八時半

▽場所、国際文化会館

▽出席者、池田知幸(石川)、牧野衛(静岡)、末松大助(福岡)、藤島玄(越後)、水野祥太郎(関西)、津田周二(関西)、須賀太郎(東海)、高山忠四郎(信濃)、石原憲治(東京)、福田文二(秋田)。

松方三郎、渡辺公平、折井健一、

神谷 恭、金坂一郎、日高信六郎

野口末延、松本熊次郎、川上 隆

山崎安治、青木 昇、皆川完一、

太田 敬、坂本矩祥、織内信彦、

竹田吉文、辰沼広吉、中島伊平、

岩佐吉雄。

▽議事 議長、松方会長

▽出席者紹介

▽各支部長より報告と要望

○静岡……JAC静岡支部として台湾親善登山隊を派遣したい。隊編成は登山、自動車の二編成とする。当遠征隊にJAC静岡支部の名称使用を許可されたい。(当件

に関しては次回理事会にて検討)

○石川……北国新聞社刊「白山」編集に石川支部が協力した。支部作成による地図「白山」が挿入されている。

・白山は北米濃地震、御母衣ダム工事等により登山路の変更、新設あり。

○東海……支部活動として講習会その他の集会あり。ルーム設置の見通しがつき近日開室の予定。

・岳連のビックホワイトピークの登山隊に会員加藤幸彦が参加した

○関西……関西在住の岳人との連絡を緊密にして未入会者には入会を勧めたい。岳連との関係を緊密にしたい。

○信濃……焼岳噴火(六月十七日)および上高地山荘の近況。

・登山教室――日本アルプス観光連盟主催、日本交通公社、JAC信濃支部協賛による夏山登山教室に講師を派遣する。当講習会は本年にて三回目であり、今後とも毎年開く予定。参加人員二五〇名、白馬、槍、燕方面。

・山岳補導員の制定、長野県遭難対策委員会が任命し、県警と協力し遭難予防に努める。人選は県山岳協会が当り推薦した。

・高山植物保護、長野営林局がパンフレットを作成し、各山岳団体へ協力の依頼あり。

・遭難記念碑が上高地駐車場側に完成した。(当支部としては反対の意志を表明していたもの)

○福岡……支部活動は内部の地固めの段階にあり、本格的活動準備中。

○新潟……三十九年度国体について。

・山岳は六月六日より五日間、飯豊連峯にて催す。国体としてはめづらしい雪中幕営になる予定。

・運営面に於てもなるべく簡素化し、遊びの要素を極力減じ、本来の登山の姿にもどしたい。国体運営(登山)についてはJACが主導権を保持したい。

・支部の諸行事に対し講師の派遣を考慮願いたい。

○東京……三水会(東京支部の定

義)の協賛、名義使用について依頼あり、承諾。

⑥七月十日開催予定の国体委員会に渡辺副会長出席の予定。

⑦会員章について (折井)

・戦前と同じ材質のものとするため見本を作り、これにより決定した。

⑧山日記について (皆川)

・各県の遭難予防に関する組織の調査をしたところ、二十七県に何らかの組織があることが明らかになり、相当量の資料が集まった。

・山日記のカットに山小屋を入れない。

・日記欄に日々の山岳史を掲載したい。

⑨ベースボールマガジン社より、登山入門書の執筆依頼について。技術委員会編とすることです承。

⑩海外遠征について

・七月十九日、ヒマラヤ委、技委、常務理事で次期海外遠征の計画を検討する。

⑪静岡支部の「中華民国訪問親善登山隊」について

・期日、十月一日―十月三十一日

・隊長山本明三郎以下八名

・台湾山岳協会他へ申請中。

▽日時、七月十四日(土)

午後三時半―八時半

▽場所、国際文化会館

▽出席者、池田知幸(石川)、牧野衛(静岡)、末松大助(福岡)、藤島玄(越後)、水野祥太郎(関西)、津田周二(関西)、須賀太郎(東海)、高山忠四郎(信濃)、石原憲治(東京)、福田文二(秋田)。

松方三郎、渡辺公平、折井健一、

神谷 恭、金坂一郎、日高信六郎

野口末延、松本熊次郎、川上 隆

山崎安治、青木 昇、皆川完一、

・登山教室――日本アルプス観光連盟主催、日本交通公社、JAC信濃支部協賛による夏山登山教室に講師を派遣する。当講習会は本年にて三回目であり、今後とも毎年開く予定。参加人員二五〇名、白馬、槍、燕方面。

・山岳補導員の制定、長野県遭難対策委員会が任命し、県警と協力し遭難予防に努める。人選は県山岳協会が当り推薦した。

・高山植物保護、長野営林局がパンフレットを作成し、各山岳団体へ協力の依頼あり。

・遭難記念碑が上高地駐車場側に完成した。(当支部としては反対の意志を表明していたもの)

○福岡……支部活動は内部の地固めの段階にあり、本格的活動準備中。

○新潟……三十九年度国体について。

・山岳は六月六日より五日間、飯豊連峯にて催す。国体としてはめづらしい雪中幕営になる予定。

・運営面に於てもなるべく簡素化し、遊びの要素を極力減じ、本来の登山の姿にもどしたい。国体運営(登山)についてはJACが主導権を保持したい。

・支部の諸行事に対し講師の派遣を考慮願いたい。

○東京……三水会(東京支部の定

義)の協賛、名義使用について依頼あり、承諾。

⑥七月十日開催予定の国体委員会に渡辺副会長出席の予定。

⑦会員章について (折井)

・戦前と同じ材質のものとするため見本を作り、これにより決定した。

⑧山日記について (皆川)

・各県の遭難予防に関する組織の調査をしたところ、二十七県に何らかの組織があることが明らかになり、相当量の資料が集まった。

・山日記のカットに山小屋を入れない。

・日記欄に日々の山岳史を掲載したい。

⑨ベースボールマガジン社より、登山入門書の執筆依頼について。技術委員会編とすることです承。

⑩海外遠征について

・七月十九日、ヒマラヤ委、技委、常務理事で次期海外遠征の計画を検討する。

⑪静岡支部の「中華民国訪問親善登山隊」について

・期日、十月一日―十月三十一日

・隊長山本明三郎以下八名

・台湾山岳協会他へ申請中。

▽日時、七月十四日(土)

午後三時半―八時半

▽場所、国際文化会館

▽出席者、池田知幸(石川)、牧野衛(静岡)、末松大助(福岡)、藤島玄(越後)、水野祥太郎(関西)、津田周二(関西)、須賀太郎(東海)、高山忠四郎(信濃)、石原憲治(東京)、福田文二(秋田)。

松方三郎、渡辺公平、折井健一、

神谷 恭、金坂一郎、日高信六郎

野口末延、松本熊次郎、川上 隆

山崎安治、青木 昇、皆川完一、

例集会)の現況について。

・ヒマラヤの夕べ——基金募集に協力するため、六月十三日虎門共済会館に於て開催、講演、楨氏、映画エベレスト登頂他、純益は基金に繰入。(16頁記事参照)

▽報告

○技術委員会より……西穂での登山講習会は本年をもって完了した(計三回)

○海外登山について……JACとしての海外登山は久しく行われていないが西穂講習会終了後の現在、技委を中心に登山技術の実践研究として、海外登山の気運が盛上って来た。過去に於てもヒマルチュリ、カンチエンジュンガの計画があったが諸般の事情で実現せず終った。今後は講習会終了を機に実現を計りたい。七月十九日ヒマラヤ委・技術委各委員会海外登山経験者により海外登山について会合をもつ予定。

○岳連関係の海外登山について

・現在四パーティが申請している

○指導部より

・大学山岳部の連盟結成について努力したい。

○ルーム・山荘基金について

・六月三十日現在

二、三五〇、三五二円  
申込口数、三四一口  
・申込締切を一ヶ月延期し七月末

日までとし、払込期日を九月末日までとする。

○ルーム移転について

・オリンピック会館建築の時期の見通しが立たないため移転時期不明、青山の新しいルームは明年三月完成の予定。全面移転まで青山ルームは図書室として確保したい。

○会費その他経理について

・今年に限り地方支部に、会費納入者一名当り百円を還付する。  
・地方在住会員のうち、支部を経由せず直接納入する会員の実状を調査する(減額納入)

・今年度入会者の中に改正前の会費にて受付たものあり、これについては不足額を徴収する。

○山日記について

・調査記事は新しく確実なものを求めている、各支部とも現地の情報をお願いしたい。

・調査方法、往復ハガキによる問合せのほか、山日記担当者が各支部に出向き資料を収集する。

・販売についても各支部のご支援をお願いしたい。六三年版は十二月上旬発売予定。

○支部よりの講師派遣依頼について

・年間行事予定に組込んで早めに知らせてほしい。費用は支部行事については旅費等は本部の負担とする。

○山岳協会

・会合の回数を増し、協会の活動を円滑にしたい。

○団体委員会

・チーム構成決定。一般四名、高校三名(監督を含む)

○対岳連について

・対人関係を通じ、円滑化を計り地方岳連の育成に努力したい。

36年度第12回図書委員会

四月十二日・ルーム

・出席者 深田、小林、徳久、加藤、大橋、古川、小沢、長谷川、小谷津

①次年度の事業について

・加藤元一氏の転勤による欠員の補充と、仕事の量が増大するのを、東京支部より、朝倉宏、鈴木郭之の両氏、他に小沢明夫、古川晶子、斉藤光司、小谷津孝明、長谷川泰三の六氏に委員をお願いする。

③仕事の分担

総務・大橋、レジスター・朝倉  
斉藤、和書・小沢、洋書・長谷

川、鈴木、小谷津、海外登山・古川。

④図書目録について (徳久)

⑤図書寄贈依頼運動について (深田)  
図書目録を全会員に配布するのを機会に図書寄贈依頼を行なう。

37年度第1回図書委員会

五月十九日二十日・教育大  
白樺小屋

・出席者 深田、小林、徳久、加藤、大橋、古川。

・加藤元一氏の送別および新委員歓迎会

37年度第2回図書委員会

六月二日・ルーム

・出席者 深田、小林、大橋、小沢、小谷津、古川。  
・議事および報告  
①和書目録が完成した。全会員に送り、同時に寄贈依頼をした。  
②新刊書寄贈依頼は積極的に行なう。

③海外登山資料収集経過 (古川)

・資料寄贈依頼状況送先26隊  
④洋書整理報告 (小谷津)  
⑤和書整理報告 (小沢)  
⑥和書索引カード、書名、著者名のカードを、昨年完成した基本カードに引続き八月中に完成する。

37年度第3回図書委員会

七月十日・ルーム

・出席者 深田、小林、徳久、鈴木、大橋、古川。

①海外登山資料収集の件 (古川)  
・追加12隊、調査項目  
・隊長、隊員、シェルパー、ポーターの数、期日、ルート、荷の重量、費用、地図、概念図(登頂の場合は、登頂者名、期日)、その他特別記事。会として特に提出してもらうものは、写真、スライドにしぼる。

②書名、著者名索引カード(和書)作成の件 (大橋)

③洋書分類目録作成の件 (大橋)

・徳久、鈴木、小谷津、長谷川の四委員で着手する。

④レジスターの件 (徳久)

⑤新刊書受入れの件 (深田)  
・新刊書の主なものは積極的に寄贈依頼を出す。

⑥分類目録の分類による代表的な図書選定の件 (小林)

・小林氏に原案を作成してもらい会報で紹介する。以上 (大橋 晋)

第三回積雪期登山技術指導者講習会報告書(36年度)  
●今春三月西穂で開かれた講習会の報告書(内容)開催主旨、行動記録、講義ノート、反省会記録、講評、受講生・講師会員の感想文を集録。全五十二頁、タイプ印刷、非売品。  
日本山岳会登山技術研究委員会

東京支部報告

四月四日 役員会

- 1 映画会開催の件
- 2 会員総会準備の件
- 3 会員集会の件(四月十八日16  
ミリ映画『初夏の上高地』酒井  
菊雄氏)

出席 折井、安彦、関口、鈴木、  
中、岩佐、坂倉、三枝、山口

五月九日 役員会

- 1 会務分担の件
- 支部長 石原
- 総務 折井、関口
- 事業 安彦、錦織、宇田川、  
芳野、篠原、大屋、野萩

会計 岩佐

集会 坂倉、中  
記録、会報 三枝、富田

図書 朝倉

資料 鈴木

庶務 山口

監事 山下、沼倉

2 評議員推選の件

神谷、村井、川森、今井(喜美  
子)今井(嘉道)、村山、太田、  
小島、網倉、佐藤(久一朗)

3 事業方針について

4 映画会準備の件

5 会員集会の件(五月十六日  
『デカン高原の話』西丸氏)

錦織、野萩、岩佐、坂倉、中、  
三枝、宇田川、鈴木、富田、山  
口

六月六日 役員会

- 1 映画会準備の件
- (1) 六月十三日映画会入場券売  
上げ状況調査
- (2) 六月十三日映画会役員分担  
について
- (3) スケジュールの作成
- (4) 六月十二日に準備会開催

2 第三水会の件  
懇談会 映画会の報告  
ウエストン祭の報告

出席者 石原、折井、坂倉、中、  
篠原、西川、岩佐、鈴木、関口  
野萩、安彦、宇田川、山口

山岳映画と講演会報告

「マナスルの夕」

日本山岳会東京支部では、去る  
六月十三日、虎の門共済会館に於  
て、山荘基金募集の一助とするた  
めに「マナスルの夕」として、山  
岳映画と講演会を催した。

今回の映画会はルーム及び山荘  
建設基金を目的に、東京支部役員  
その他会員諸氏が、入場券の売捌  
きに協力して下さったので、当日  
売は殆どなくなり、嬉しい悲鳴を  
あげる始末だった。

当日五時半頃より来場者は続々  
とつめかけ、山岳会関係及各大学

山岳部員や、女性の姿も非常に多  
く見受けられた。

定刻六時に錦織氏の司会により  
開会、石原支部長の挨拶があった  
後、中共映画「登頂世界最高峯」  
の上映があった。

この映画は中共映画として期待  
されていたが、最後が割合にあっ  
けなく終わったので、一瞬がっかり  
した感じを受けたようであった。

次に名誉会員の榎有恒氏の講演  
で、久しぶりのおだやかなお話し  
満員の会場は静まり返ってしま  
った。

只時間の関係で、これから本題  
に移って面白くなる頃時間がきれ  
たので、残念だったという声が多  
かった。

その後はかつて感激のうちに、  
数年前に上映された、毎日新聞社  
の「マナスルに立つ」が再度上映  
され、再び当時の感激を新たにし  
たが、隊員の若かりし頃の活躍姿  
や、当時の涙ぐましい感激がよみ  
がえって来た。

当日は休憩時間にヨードルが演  
奏され、山の映画会の気分は満点  
であった。

今回の映画会には諸先輩始め、  
会員の皆様の絶大な御協力を得た  
上に「エベレスト」の映画を提供  
して下さいました中央映画貿易株式会  
社々長屋野氏並びに「マナスルに

立つ」を提供下さった映配株式会  
社の御協力と、この企画を後援し  
て下さった、スポーツニッポン新  
聞社並びに、全般的にいろいろと  
御指示を頂いた毎日新聞社古市美  
津雄氏に、この機会に御礼申上げ  
たいと思う。

なお今後も、このような催には  
是非会員諸氏の御協力を得て、成  
果をあげたいと思えますので、次  
回開催の折もよろしく願ひ上げま  
す。  
(坂倉記)

追って、この「講演と映画の会」  
に於て次記の収益をあげ、山荘基金  
に金額寄附したのでここに報告申上  
げる。

|        |         |   |
|--------|---------|---|
| 1047枚  | 104,700 | 記 |
| 上げ附    | 2,100   |   |
| 入券     | 106,800 |   |
| 入寄     |         |   |
| 計      |         |   |
| 料税他代他  | 17,200  |   |
| 用の其    | 9,510   |   |
| 使場刷費計  | 13,668  |   |
| 出場の礼務  | 4,750   |   |
| 支会入謝印事 | 2,620   |   |
| 残      | 47,748  |   |
|        | 59,052  |   |

山梨支部事務所変更

○新事務所 甲府市穴切町四七七  
望月雅郎方

電(甲府)七八〇九

## 山形支部主催

月山の春スキーと熊  
肉を食う会

村井米子

山桜の薄紅の雲、片栗の花の薄紫の絨氈、水芭蕉の白、座禪草の赤紫……雪と若緑との天地になまめかしく彩る花芽が、濡れるともしもなき霧雨にけぶって、大朝日連峯登山口大井沢の山村は、いともみづみづしい。昨夜十一時半に上野をたち、翌五月十二日の今朝十時には、もうこの雪山に囲まれた山家の春に陶醉してゐることが、何か夢のようである。

大井沢の部落には、すぐれた自然博物館がある。先づ訪れると二十貫五百という大熊の剥製が目をはひき、二十鼠よりも小さいヤマネの生きたのが冬眠してゐた。その大熊と同じ位の一週間前にとれ、夜の御馳走に供された……。熊狩りの名人、志田忠儀さんに聞くと、その時大小三頭の熊があつた。映画も撮ったと後に映写したが、朝日の支峯、赤見堂岳の八久和川に面する急斜面の雪を、撃たれてゴロゴロ転がり落ちる大熊が実に生ま生ましかった。熊の前に鈴羊がとび出して、ハッと驚いてスッ飛んでゆくスマートな姿態

も、よくカメラが追って珍らしかった。

博物館には鈴羊の腹中の仔まであり、鳥や獣やの数が多く、いかにもみちのくの深山の郷土色が濃

い。会は、午後三時学校の教室を借りて始り、先づ熊狩り映画を見てのち、まだブンブンと体臭を放つ大熊の剥製の前で懇談会……型通り主催者西川町長さん、大井沢山岳会長さん、山形支部と県山岳連盟長後藤幹次さん、後藤恵治さんや県観光課長石山さん等の挨拶、東京支部から神谷老の答礼などの後、かもしか学園で知られた佐藤校長の自然科学教育苦心談、志田さんの熊狩りの話……みな印象的だった。

走せ参じた者は、秋田支部長荒巻さんと高田さん、酒田の豊田さん父子、斉藤さん、鈴木さん、鶴岡の村上さんと東京勢、地元の方々を加へると七、八十人となる。会食は、また学校の教室で行はれた。

熊狩りの祝宴と同じ熊汁、コゴミ、ウド、キノメ、ジューナ、ギブノリなどの山菜、山形の地酒の芳醇な香り……山の夜の静寂を破って歓談放談。のち江戸屋と他一軒に分宿した。

翌朝は快晴、北の空には月山が

のっぺり白く、南には朝日の岩尾根が黒斑で……すがすがしい大観だ。七時半、江戸屋の美しい主婦さん達に送られて出たバスは、昨日の道を月山沢まで戻って北へ折れる。戦後はじめて月山の春スキーを山形で計画のときは、月山沢から雪道を歩いたが、もう指折れば十二年の昔となった。

志津の「ほていや」は昔のまゝで、雪解の水の流れを前にしてゐた。今年は雪が多いとて、すぐ五色沼のふちからスキーが穿けるが、踏み堅められても居るので担いで登る人が大部分である。担ぐのは苦手の私は、スキーをつけようとしたら、志田さんがとって担いで下さった。ブナ林の若葉が登るにつれて若芽となり、ふり返ると朝日連峯が晴れわたって、一つ指呼される大展望の快適さ……小鳥の声も冴やかだ。

志津から一時間余で姥沢の小舎に着く。まだ十一時前だが昼食、小舎のなめこ汁と山菜の行者ニンニクが美味しかった。

また登ること一時間余、姥の稜線に出たら、一天俄にかき曇って、あれよあれよという間に豆粒大の雹が叩きつけてきた。背や顔が痛い。

——だから春山は危ぶまない——と顔見合せつつ、下山ときめてス

キーを走らせると、すぐに姥の小舎に着いてしまった。一と休みして、小雨のブナ林の滑走をたのしみながら志津に下ったのは、まだ二時過。

志津で、また上手な山菜料理に秋田の銘酒で別れの宴……どうも滑ってゐる時間より、宴の時間のほうが多かつたらしいが、荒牧さんが——秋田でもやろう——と提唱されたほど、たのしい岳人の集ひだった。

山形や大井沢の皆さんに、一方ならぬお世話になった御礼を、ここに述べさせて頂きます。

(東京支部参加者、神谷 恭、麻生武治、松本熊次郎他二名、野口末延他三名、太田 敬、朝井一男、建石八重、村井米子)

## 二二一号訂正

ユードル長官と富士に登る

二頁三段 印刷の手違いで、一部会報の中に、三、四段の境に太いケイ線の浮き出ししているのがありました。不用のケイでお目障りのことと思ひます。おわびします。

## 父、牛歩の思い出

八頁一段

Kobe, Working, Society は  
Kobe, Walking, Society の  
誤りでした。



佐藤久一朗画

(I) ペルー政府発表  
の免税処置と報告  
義務

ペルー国通商財務省訓令第一五一号によると、登山及び科学調査のための遠征隊が携行する物資に対しては、総て関税が免除されることが瞭らかとなった。従来も免税ではあったが、免税申請手続がないと徴収されるおそれがあった。

また、同じく文部省告示第三〇三八号では、各遠征隊が帰国してから発表した。報告、地図、論文、図書、写真等は、その一部を必ず、文部省マントス課に提出すること、というふうになつてゐる。

但し以上の二つが、いづれから施行されるのかは瞭らかでない。いづれ調査の上、この誌上に発表するつもりである。尚、ペルーに入った遠征隊が、地質学的及び氷河学上の調査を行なつた結果、山中溪谷に住む住民に危険があると思われた場合には、恐れ入ります、とは書いてないが、その旨を文部省インデス課まで、報告して欲しいといふことが、つけ加えられてゐる。

(吉沢一郎)

(II) ネパール政府登  
山規則に対する追  
加規定

ネパール政府の登山規則については、会報一九三号及び日本山岳会編・毎日新聞社刊「マナスル」一九五四〜五六二一八頁〜二二二頁に紹介をされてゐるが、ネパール政府はその後、同規則第十二条のロイヤリティ支払方法について改訂補定。同十五条にサード、シムルパ、ポーター等をヒマヤン・ンサエティを通して雇働せねばならぬ旨の補定を加えていたが、この度一九六二年一月一日付を以て第十六条〜第二十條を追加、ネパールにて消費される装備品に対しての課税、並びに再輸出される物品に対しての保証金供託規定を追加した。追加規定次の通り、

- Terms and conditions for carrying mountaineering Expeditions to the Himalayas in Nepal.**  
January 1, 1962.
1. Rule (I) is quite clear.
  2. Rule (II) The Liaison Officer shall be paid Rs. 320/-per month by the party. He shall also be provided with food, sleeping bag and other necessary facilities during the Expedition.
  3. Rules (III) to (XD) are quite clear.
  4. Rule (XI) Royalties shall be payable on the following scale:-(a) For an Expedition to Dhaulagiri, Everest/Rhotse, Makalu, Chio Oyu, Manaslu, Kanchenjunga, Annapurna-Rs. 4,800/-(b) For an Expedition to a mountain over 25,000 foot high not included in the above-Rs. 3,200/-(c) For an Expedition to a mountain below 25,000 foot in height-Rs. 1,600/- These royalties shall be payable irrespective of the size of the Expedition itself and shall be paid either in Dollar or Pound Sterling or the currency of its own country. In the case of scientific Expeditions, the royalty shall be Rs. 1,600/-for an Expedition of 4 persons and above, and Rs. 800/ for a smaller Expedition. Half of the royalty amount shall be paid in advance to His Majesty's Government of Nepal within one month of the receipt of official permission for expedition, failing which the permission shall be treated as automatically cancelled. The other half shall be paid the party to the Ministry of Foreign Affairs on arrival in Kathmandu before the Expedition starts. Should the party cancel its plan after depositing the advance amount, the amount so deposited shall be forfeited by the Government.
  5. Rules (XIII) to (XIV) are quite clear.
  6. Rules (XV) His Majesty's Government of Nepal shall henceforth give recognition to these foreign parties visiting Nepal who undertake to carry mountaineering, scientific and similar expeditions in Nepal by arranging the provision of Sherpas and Porters required for the same through the Himalayan Society, Kathmandu.
  7. Rule (XVI) The Expedition parties from foreign countries entering Nepal for climbing the peaks and undertaking scientific research on the Himalayas preper are hereby required on their entry into the territories of the Kingdom of Nepal to make two separate declaration regarding the details of the goods required (i) for the actual consumption in Nepal and (ii) for exportation back to their countries respectively. Customscharges shall be levied on the goods of the former category, i.e., the goods for actual consumption in Nepal, except on the personal belongings falling under the baggage rules of His Majesty's Government of Nepal.
  8. Rule (XVII) Customs charges shall have to be deposited with the customs authorities for the goods falling under the latter category, i.e., the goods for reexportation, and the amount so deposited shall be refunded on the parties' exit from Nepal. Should they, however, fail to carry back with them the declared goods under the latter category, necessary charges shall be debited from the above amount in deposit.
  9. Rule (XVIII) Such parties shall undertake to defray all their costs in Nepal if possible in U.S. Dollars or Pound Sterling, and if not, in the currency of their own country by exchanging them through the Ministry of Foreign Affairs.
  10. Rule (XIX) These regulations come into effect from the beginning of the year 1962 A.D.
  11. Rule (XX) Other research parties not falling under any specific agreement shall not be entitled to customs exemption. Ministry of Foreign Affairs, His Majesty's Government of Nepal, Kathmandu.
- 右登山規則を邦訳するべからざるの通り。
- 一、第一条は従来通り。
  - 二、第二条。連絡官に対し、遠征隊は、月三三〇Rsを支払い、且、遠征中に必要な食料、寝袋その他一切の装備を支給する。
  - 三、第三条〜第十一条は従来通り。
  - 四、第十二条。許可料(登山及び科学調査)は、次の基準に従つて払込さるべし。

a ダウラギリ、ニベレスト、ローツニ、マカロー、チョー・オニ、マナスル、カンチエンジュンガ及びアンナプルナに対しては四八〇〇Rs

b 上記を除く二五〇〇呎（七六二〇米）以上の山については、三二〇〇Rs

c それ以下の山については一六〇〇Rs

上記の許可料は、その遠征隊の規模には関係がない。許可料の支払いは、インド、ドル、或いはその国の貨幣で行う。

四人及びそれ以上の科学的な遠征隊は、一六〇〇Rs、但し一人から三人までの場合は八〇〇Rsとする。

公式許可を得た後一カ月以内に、許可料の半額を払込むこと、それを怠った場合には、その許可は、自動的に取消される。

残りの半額は、カトマンズに到着してから、出発するまでの間に、政府に払込むこと。前払金を支払った後、その計画を取消した場合には、その前払金は政府に没収される。（注・計画を変更した場合の増、減の差額については触れない）

五、第十三条〜第十四条は従来通り。

六、第十五条。以上の手続きにして遺漏なき場合に、ネパール政府は、登山、科学及びこれに類する外国の遠征隊に対し承認を与え、且つカトマンズのヒマラヤ協会を通じサード、シムルバ、ポーターの準備を取り極めること。

七、第十六条。ネパールへ入る外国の遠征隊は、必要装備（食糧も入るのか？）品の明細書を二つに分けて各々を提出すること。

(一) 搬入した日々消費財

(二) 自国に持ち戻るもの

通関料は(一)の物資に対して徴収する。（独語訳では、結局は同じことになるが、両方に対してとなると異なる）但し、ネパール政府の手荷物規程に該当する私物（個人的所有物）には税金はかけない。

八、第十七条。(二)に該当する通関料は、一応税関当局に供託されるが、再搬出される物資に対する供託金は、ネパールを離れる際に遠征隊に払い戻される。但し(二)に属する申告荷物で持ち返えられなかったものに対しては、それに相当する関税を供託金から差引く。

九、第十八条。ネパール国内での購入は、出来ればドルまたはホンダで行うこと。出来なければ、ネパール外務省で両替する。

一〇、第十九条。以上の規約の実施は、一九六二年一月一日よりこれを行う。

一一、第二十条。特別協約に該当しない他の調査隊には、関税免除の特典がない。

高、通関料の細目については発表されていない。

\* \* \*

Rsとあるのはネパール・ルピーで邦貨約五〇円に相当する。

(吉沢一郎訳)

追 補

一九六二年ブレモンストーン期にネパールに入国した登山隊に対しては、前記一九六二年一月一日付の登山規則が適用されたが、この課税、保証金供託制度には問題多く実際問題として財政的に豊かでない小登山隊にとっては大きな問題となった。そこで各国の登山隊はネパール政府に対し、強くこの制度の善処方を要望していたところ、この度七月二十四日付を以てこの点の規則を緩和する旨の外電(U・P・I)が入った。

KATHMANDU, NEPAL, JULY 26 (UPI) THE NEPALESE GOVERNMENT WEDNESDAY LIBERALIZED THE REGULATIONS FOR MOUNTAIN EXPEDITIONS IN THE HIMALAYA IN A MOVE TO PROMOTE MOUNTAINERING AS A SPORT AND TO INCOURAGE FOREIGN CLIMBING TEAMS TO VISIT NEPAL.

THE GOVERNMENT ANNOUNCED THAT HENCEFORTH NO EXPEDITION WILL BE REQUIRED TO PAY CUSTOM DUTIES ON ITS GOOD IMPORTED INTO NEPAL OF MORE THAN TEN PER CENT OF ITS PURCHASE VALUE.

FORMERLY EXPEDITIONS WERE REQUIRED TO PAY BETWEEN 70 TO 90 PER CENT DUTY ON THE GOODS INCLUDING CLIMBING EQUIPMENTS, SCIENTIFIC APPARATUS AND TINNED FOOD.

ANOTHER CONCESSION GRANTED BY THE NEPALESE GOVERNMENT TO THE CLIMBERS WILL BE THAT EXPEDITIONS VISITING NEPAL'S HIMALAYA SHALL NOT BE REQUIRED TO DEPOSIT CASH

MONEY AS SECURITY AGAINST THE RETURN OF THEIR EQUIPMENT OUT OF NEPAL.

この外電の要旨は左記の通りである。

「ネパール政府は、登山をスポーツとして促進し、外国遠征隊のネパール訪問を奨励するため二十四日、登山規則を緩和した。同政府は、今後どの遠征隊もネパール国内に持ち込んだ物品に対し、その購入価格の10%以上の関税支払いを要求されることはない、と発表した。従来各遠征隊は登山装備、科学器具、缶詰食糧を含む物品に対し70%から90%の課税支払いを要求されていた。また、ネパール政府は、ネパール・ヒマラヤを訪れる各遠征隊が、彼らの装備のネパール国外再輸出に対する保証として現金を供託するよう要求されることはない、という譲歩も認めた。」

(藤原文雄訳)

ユプラン・ニュース

英国女子ヒマラヤ登山隊は五月十四・十五の両日、ガンジロバ・ピーク(二二〇〇呎)の登頂に成功した。

十四日ジ・セヴァイン・スカール、バーン・スバーク両嬢はミンマ・ツェリ・ン・ンバ・ノルプの二名のシェルパとともに午前九時登頂、ひきつづき翌五月十五日マンシー・スミス博士、パトリシア・ウッド両嬢はアンテンバ、カチャイヤの二名のシェルパと第二登山を行った。一行はドロシー・グウウ・イナ伯夫人をリーダーとする六名で、最初ジャグドラ・ピークを登る予定であったが登路を見出すことができず、カンジロバに目的を変更した。(Y)

昭和三十七年八月二十五日発行

東京都千代田区  
神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

頒価二十円

電話神田(03)八九五二番  
振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂溜池五番地  
印刷所 株式会社 技報堂